

「講」を源流にもつカラオケ喫茶 —西三河のモーニング戦争と70代の楽園—

大 崎 洋

1 はじめに

カラオケ喫茶とは、夜だけ営業するスナックとは違い、昼間からカラオケを歌いたい人達が集う場所として、高齢者を中心に広がった喫茶店の一形態である。35～40年前が発祥といわれる。そこでは、演歌や歌謡曲を中心に歌われる。

昨年(2019)度は、愛知大学総合郷土研究所の研究費助成を受けて東三河のカラオケ喫茶28軒を訪問した。地域文化としてのカラオケ喫茶について考察し、その成果を『地域文化としての「東三河カラオケ喫茶」』(紀要第65輯)にまとめた。

本年は、西三河のカラオケ喫茶を訪問した。コロナ感染拡大防止に伴う自粛営業期間もあり、訪問軒数は10月30日現在、20軒にとどまった。

「表2 訪問した西三河のカラオケ喫茶」
ほとんどのお店は、コロナ感染拡大防止に伴い、公共施設での歌謡祭は中止・延期となった。店内でのイベント(歌謡祭など)は一部のお店を除いて自粛しているが、通常営業は、店内では感染防止予防に万全を尽くしていた。

本年6月中旬、かつて無尽講⁽¹⁾の講員であった田原市のカラオケ喫茶の経営者から次のような話を伺った。

「もう40年位前になるが、町内で構成する、無尽講の活動で藁ぶきの屋根の藁の取り換えや大家族の布団の購入・搬入が終わった後は、当番の人の家で講員が集まり、懇親会を行うのが恒例だった。そのうち、講員も高齢化し、酒量も減ってきた。家庭での懇親会は準備が大変なので、懇親会は、喫茶店へお茶を飲みにいこうという話になり、そのうち講員の中から喫茶店を開く人が出てきた。しばらくしてその店でカラオケを歌いたいという声が多くなり、カラオケ喫茶に模様替えした。」

現在、そのカラオケ喫茶は閉店しており、話を聞くことができないが、この時、カラオケ喫茶と「講」は何か繋がりがあるのではないかと、時の流れを経て「講」からカラオケ喫茶にゆるやかにシフトしていったのではないかという問題意識をもち、本論説で考察する。岡崎市のカラオケ喫茶「バイオレット」⁽²⁾のママさんの話では、「カラオケ好きの真言宗の住職さんが、「講」の後、本堂でカラオケをやっている。」という話を聞き、早速、お寺に問い合わせたが住職さんが体調を崩し、6年前から本堂で歌は歌っていないということであった。

お寺での「講」は、住職さんの話を聞いた後お茶を飲みながら懇談、その後、気の合う人達で喫茶店へ行き歓談、歌好きの人はカラオケを歌いたいということで、喫茶店でなく、

カラオケ喫茶へ行くようになったと推察できる。中には、岡崎市内の天台宗の住職さんや豊川市の豊川稲荷（妙厳寺）の僧侶の話では、カラオケ好きの僧侶も、講員のひととカラオケボックスにご一緒することがあるという。筆者も近所に住む住職さんの歌を聴いたことがあるが、読経で鍛えたノドはなかなかであり、聴くものの心に沁みる。

次に西三河の講集団について述べる

2 西三河の講集団

2.1 講について

講について、桜井徳太郎（1917-2007）は、「宗教上もしくは経済上その他の目的を達成するために、志を同じくする人たちの間で組織された社会集団の一種である」と規定している⁽³⁾。

また、『山村生活の研究⁽⁴⁾』のなかで「部落と講」の執筆を担当した守随一（1904-1944）は「講は直接には部落と関係がない如くである。一定の講員が寄り合って親睦し共同飲食をするといふ所に講の最も中心な点が存すると云っても決して過言ではない。従って同一

部落内で有志のみが集る講もあり、一部落を超えて行はれる講もあるのは当然である⁽⁵⁾」と述べている

講の起源は仏教を講ずる、經典を講義するという意味の講から始まった。「法華經」という經典を八回に分けて講ずるものを法華八講といい、奈良時代に始まった。さらに平安時代に入り、盛況を呈した。

そして江戸時代に無尽講、頼母子講にみられる金融融通制度としての講や、民間信仰に基づく講など多様に存在していた。そしてこれらの講はひとつの村や町のなかにおいていくつも存在し、それぞれ異なる構成要素を含んでいた⁽⁶⁾。

講は、「表1 講の分類」⁽⁷⁾に示すように①信仰的機能を持つ講、②社会的機能をもつ講、③経済的機能をもつ講に分類される。

2.2 西三河の講集団の現状

本年10月30日までの調査（電話での聞き取り含む）では、西三河地方の「講」の現状は次の通りである。

表1 講の分類

信仰的機能をもつ	民間信仰型	田の神講、山の神講、地神講、水神講、雷神講、日待講、月待講、庚申講、巳待講、十九夜講、二十三日講など
	氏神型	宮座講、各社・大社に関する講（春日講・八幡講・白山講など）
	代参型	伊勢講、熊野講、富士浅間講、赤誠講、愛宕講、金毘羅講、戸隠講、御嶽講、三山講、富士講など
	仏教民俗型	法華講、報恩講、観音講、地藏講、薬師講
社会的機能をもつ講	年齢集団型	子供組の講、若者組の講、老年講、同年講など
	社会娯楽型	遊山講、寄合講、同行講など
	民俗芸能型	地芝居の講、旅芸人の講、神楽講など
経済的機能をもつ講	金融目的型	頼母子講、無尽講など
	労力交換型	モヤイ講、ユイ講など

出典：上野和夫編「民俗調査ハンドブック」吉川弘文館 1987

1 信仰的機能を持つ講

秋葉講、誕生講（岩津神社）、富国大栄講（豊川稲荷）、念仏講（浄土宗）、節分講（天台宗）、法華講（日蓮宗）である。西尾市行用は真宗と浄土宗の檀家が混じるムラであるが、葬送後、講仲間や同行などが念仏をあげにきたという記録⁽⁸⁾があるが、現在ではほとんど行われていないという⁽⁹⁾。伊勢講や庚申講もかつては盛んであったが、現在では目立った活動がみられない⁽¹⁰⁾。

2 社会的機能をもつ講

子ども組の講は子ども会、若者組の講は青年団と名称を変えたが、青年団はごく一部の地域で存在するが、多くの子ども会は少子化に伴い消滅している。

老年講は老人会として、現在では老人会全体としての事業は、総会とそこに付属する会の活動のみになっている。老人会での活動の中心は、会の中で趣味のサークルを作り、そこに同好の人たちが集まることになっている。どの会でも、カラオケ教室が一番人気があるという。高齢化により、老人会の定番である旅行もなくなってきている。

3 経済的機能をもつ講に

無尽講は消滅し、頼母子講は一部の飲食店経営者が仲間と娯楽の一環として、頼母子講を継続しているという程度である。

地域の暮らしを支えてきた講が、一様に消滅した最大の原因は、時代の推移とともに銀行や農協などの金融機関が各家庭の家計のなかに介入・定着し、こうした小規模の経済的互助組織は必要でなくなったからという理由に基づく。さらに、高度経済成長等を経て、日本全体の生活水準が向上したことから、こうした組織に頼らずとも暮らしが成り立つようになったといえる。

30年前の分析になるが存続する講の傾向性として、おおむね次のような傾向が認めら

れるとされる⁽¹²⁾。

- (1) 50年間で半数以上の講が消滅し、とりわけ存続度が低かったのは、信仰的講では代参型講および在地講のなかの民間信仰の講、それと経済的講である。
- (2) 信仰的な講では、構成員の減少、開催日程の変更、さまざまな実施内容の変化衰退などの機能低下がみられ、形骸化しつつ存続している講が多い。しかし、組織を再編成して存続に努める事例も散見する。
- (3) 特に女性の講では、年齢層の高い方がより存続率が高い。
- (4) 頼母講など経済性の高い講が消滅していたのに対して、社会的機能性の高い契約金や葬送儀礼関係の講は維持されている。
- (5) 一つの村の中でも、講の存続・消滅のありようにはバリエーションがあり、地区間偏差が認められる。
- (6) ムラ（村）社会の枠組みの内部だけで拘束されることが難しい講の中には、比較的維持されるものが認められる。
- (7) 講がもつ本来の目的よりも、娯楽性が強調されたり、サロンの意味合いが濃くなっているものが少なくない。
- (8) 講が消滅しても、それに代わる新たな集団の結成が各地でみられる。

現在では愛知県内においても、多くの講が機能を停止、活動を縮小しているが⁽¹¹⁾ 西三河とて例外ではない。

次に調査した、西三河カラオケ喫茶事情について述べる

3 カラオケ喫茶の調査方法

まず、お店に電話をいれ、調査目的・調査内容を述べ、お店の都合のいい日に訪問する。お店を訪問したら、終始、笑顔を絶やさないことを心がけ、500円でコーヒーを注文する。カラオケチケットを1000円で購入し、順番

がきたら、1曲しかない私の持ち歌、小林旭の「熱き心に」を臆することなく、堂々と歌う。下手である故に店内に強いインパクトを与えた後、経営者（マスター・ママ）そしてお客に話を聞くというスタイルをとった。調査項目は経営者（マスター・ママ）には、①営業年数 ②営業時間 ③料金 ④お客の年齢層 ⑤お店を始めたきっかけ ⑥お店の自慢できるところ（ウリ） ⑦お店をもってよかったこと ⑧経営者として苦労していること・困っていること ⑨講との関わりなどである。お客には、①お店に通う理由 ②よく歌う曲 ③何歳頃からお店に通い始めたか ④移動手段 ⑤店に通う頻度（1週間での回数） ⑥1回の滞在時間 ⑦1回に使うお金 ⑧講との関わりなどである。写真はすべて筆者が撮影した。

4 西三河のカラオケ喫茶事情

4.1 全般

カラオケ喫茶の営業は午後からが一般的であり、午前からの営業においても、モーニングサービスとして右の写真のようなゆで卵かトースト+お菓子（のど飴は必ずつく）といったパターンである。西三河においては、午前からの営業（大体10時から）は、競ってこれでもかという位のモーニング（まさにモーニング戦争）をつける。



写真1 カラオケ喫茶のモーニング

お客は老人会で活躍する70代の人達が中心であり、東三河のカラオケ喫茶にみられるように順番に歌を歌い、それを静かに聞き拍手をするだけの空間とは大きく違い、歌を歌う人・聞く人・おしゃべりをする人といった、さながらにぎやかな「70代の楽園」である。

4.2 岡崎市

①バイオレット

夜はカラオケ・スナックとなり、よく流行っている。青森出身のママは自称「がらっぱち」、39年前縁あって岡崎にきた。21年間、お店を長く続けてきたコツはプライベートなこと、特に職業は絶対聞かないこと、と言う。客の平均年齢は70歳（最高齢93歳）。夜のカラオケ・スナックは男性は40代、女性は30代のカラオケ好きのお客さんが多い。ママは、このお店は、お客が多いのでいろいろな情報が入る。お客は寂しくて、繋がりを求めている、とのこと。コロナ感染拡大中においてもお客さんのリクエストで感染防止対策を万全にし、営業を続けていた。中々腹のすわったママである。音響のよさがウリ。

②スマイル

岡崎の老舗店。店内は、50人は裕に入れるスペース。劇場にある音響機器を設置しており、音響は抜群、私の下手な歌でも、店内によく響いて、とても気持ちよく歌うことができた。マスターはぴんから兄弟の宮史郎にそっくり。ぱっと見はちょっと怖いが店内での進行役・歌謡講師を務める。ママのモットーはスマイル（笑顔）。とてもやさしいマスター・ママなので30年近く営業を続けてきたことも納得。お客は岡崎市内の人が中心。店内が広いので、他のカラオケ喫茶やカラオケ教室のミニ発表会に毎月使用される。

③えみ

ママはカラオケ好き、起重機のオペレーターの仕事をしていたが、3年前に前経営者から譲り受ける。ファミリー感のある、親切

なお客、明るい雰囲気、皆で歌を楽しんでいる。

昼食前後の時間帯がピーク。70代のお客が中心、歌唱のレベルは高い。ママはお客のトラブルに関わることが一番イヤなこと。どちらかの肩を持つとまずいから、と言う。

④花音

店内は明るく、音響もよく、お店はゆったりとした広いスペース（40座席）である。

ドラムが置いてあり、毎週木曜日にはドラマーを呼んで、歌いやすく、カラオケに合わせてドラム伴奏のサービス。高齢のお客がNHK朝ドラ「エール」でも話題になった、古関裕而作の「船頭可愛や」を歌い上げていたのが印象的。皆が歌を楽しんでおり、歌の後は全員が拍手をしている、とてもいい雰囲気。

4.3 刈谷市

⑤絆

人柄のいい夫婦が経営、人情味があり温かさを醸し出している。マスター・ママの前職は会社員、店名「絆」はお客さんとの強いつながり、絆が第一にと考えて付けたとのこと。グループ連れが中心で、お客さん同士のデュエット曲が多く、とても雰囲気はいい。ママのイヤなことは女性客からたまに文句を言われること。モーニングはこんなに出して経営は大丈夫かなと思うくらい盛沢山。お客の最



写真2 人情味溢れる経営者夫妻



写真3 「絆」のモーニング

高齢は92歳、自分で車を運転してくる

4.4 豊田市

⑥わらら

店名は笑楽(笑ってたのしむ)に由来、西三河のカラオケ有名店。訪問した際も20人超のお客がいた。金髪で元気のいい元介護士ママには圧倒される。お客は明け透けなママを中心とした、まさに現代の「歌の講」の代表といえる。コロナ期間でも営業、店内でのイベントも開催、希望する客のため、店内に貸衣装まで準備。15品目のモーニングが自慢、15時には来店者全員に日替わりおやつサービス、ソフトドリンク飲み放題1000円と、至れり尽くせりのサービス。刈谷・知立・安城・みよし・足助からのお客がいた。

中京テレビの取材があり「PS. 純金ゴールド」で放映された。年末には、岐阜県のお千



写真4 「わらら」のママ



写真5 「わらら」の店内

代保稲荷にお客と大型バスを貸し切り参拝に行く。

⑦わたしの朝

営業8年、おしゃれな感じの店内、夜はカラオケ・スナックとなる。店名「わたしの朝」はかつて流行っていた銀座のお店からつけた



写真6 仲のいい経営者夫妻



写真7 「わたしの朝」モーニング

とのこと、ママの前職は医療事務、調理師免許をもっており、写真のようにモーニングがお店の売り、特に煮物の3品目が付くモーニングは絶品である。

お店主催の歌の歌謡祭では他のお店のママとの連携が良く取れているように感じた。

⑧うた club さんくす

美人ママ目当ての男性客が多い。音響・店の雰囲気ともにいい。コーヒーは1杯ずつドリップで出すので上手い。コロナ自粛後の10月4日、50代～80代の人に参加して11時からお店で「第82回歌謡ライブ」が開催された。写真はライブ前のママを中心とした集合写真。

ライブは食事付き3000円、歌う曲は演歌の新曲、ちょっと前の歌謡曲などである。歌好きのママ、15年営業して良かったことは、歌を通して多くの人との繋がりができた



写真8 ライブ前の記念撮影



写真9 店内でのライブ

こと、と言う。

⑨マリア

コロナ感染症対策が十分取られていた。店内はカラオケ喫茶の王道をいくような作り。ママは宗教画が好きで、マリア像から店名をつけた。離婚後5人の子どもを育てながらカラオケ喫茶を営業してきた、苦労人で人情にあふれる魅力的な女性である。

高齢者がカラオケ喫茶に通うことで、お客同士の情報交換ができ、特殊詐欺防止になると勧める。ママはお店の魅力を「食べて飲んで歌えて、ごちゃまぜの店」という。600円のソフトドリンク付きモーニング・ランチはお得感満載。



写真 10 「マリア」は歌の楽園

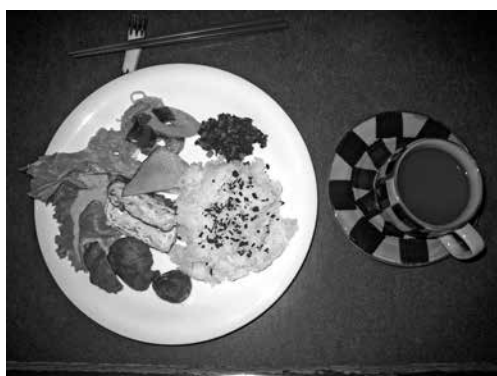


写真 11 「マリア」のモーニング・ランチ

⑩希望の樹（ゆめのき）

勘八峡のそば、まるで隠れ家のようなカラオケ喫茶。20人くらい入れる店内のつくり、

お客同士は親切でとても仲良く感じた。新曲を競うように歌っていたのが印象的。

⑪パートⅡ

営業21年、マスター・ママとも宮地オサムの大ファン、家族との付き合いがあるということで、今年は開催できなかったが、去年は豊田市文民文化会館大ホールでの20周年記念歌謡祭に宮地オサムをメイン・ゲストに開催した。約1300人の観客を集め、入場料の一部を豊田市福祉団体に寄付し、市から表彰される。トヨタ関連企業のOBが多く、歌は演歌を中心に歌われるが、皆、上手である。客層は40代～80代で高齢者は老人会の会合の後、連れ添って来店するそうである。年金支給日はお客でお店が一杯となる。

店のモットーは「女性が一人で来れる店」。



写真 12 「パートⅡ」のママ



写真 13 「パートⅡ」の店内

⑫成ちゃん

店名「成ちゃん」はママの本名鈴木成子（せ

いこ) からとった。20 年続く豊田の老舗店、「成ちゃん」は 5 代目の店。古くから通う 70 代を中心としたお客で、近所の人が集いあう、さながら「現代の歌の講」といった感じである。何もかも、昭和テイスト溢れるお店である。

4.5 安城市

⑬にりん草

母・息子で営業しており、店内に入ると、妙に落ち着くことができ、家庭的雰囲気溢れるお店。日曜日の夜は懐メロのみの歌営業。モーニングサービスは、うどん・パン・卵・サラダが付いており、かなり豪勢である。親切な対応と音響の良さを感じた。



写真 14 「にりん草」近所のお客



写真 15 「にりん草」モーニング

⑭ニューセブン

営業 5 年 (母の代からのスナックを含めると 40 年)。スナックが本業だが、売り上げを補填するために昼間のカラオケ・スナックを開始。ゆったりした、おしゃれな店内だが、最大人数 7 人とコロナ感染対策を十分に配慮していた。お店でのミニライブを年に 2 回。60 代から 80 代の女性中心の客、豊田・岡崎方面からの客が多い。お店を続けて良かったことは、いろんな人と付き合える。イヤのことは高齢者の客が多く、回転が悪い売り上げが伸びないとのこと。静かなお店の雰囲気、お客は拍手をしてマナーがいい。

コーヒーは 1 杯ずつドリップされ、とてもおいしい

⑮ニューサルビア

10 年前、安城の人気店「サルビア」を買い取り、「ニューサルビア」としてスタート。店内は 20 人超の高齢者が多く、さながら老人会のカラオケ発表会の様相を呈する。お客は心底歌を楽しんでいる様子。コーヒーは 1 杯ずつドリップされており、おいしい。2 時間ごとに窓を開け、換気を徹底しておりコロナ感染対策には万全。店内のお客は自由に小声で話し、歌を聞いたりしてマナーはよい。

ママは、「カラオケ喫茶は一人暮らしを救う、配偶者がなくなってからカラオケに通うのは認知症予防に一番」と語る。ウリは、お客さんのことを一番考えた対応だという。

また、それが自然に感じられた。

⑯茶楽

15 年前、居酒屋からスタート、一緒に経営していた息子さんの体調不良により、カラオケ喫茶に転向。ソフトドリンクにカラオケチケット 3 枚付くというありがたいサービス付き。お客の最高齢は 2 人の 95 歳、近所のお客が中心である。お客の中に、岡崎に山荘を所有している人があり、2 カ月に 1 回その山荘でバーベキューパーティのイベントを開催している。ママは「カラオケ喫茶なんて儲

けがない」と嘆きながらお客さんのリクエストに気軽に応じデュエットをしている。

カラオケ喫茶を続けてよかったことは、人との繋がり、嫌だったことは97% ないという明るいママであった。

4.6 西尾

⑰あさの

営業18年、ボックスとカウンターのゆったりとした配置、9月に訪問したときは20人位でミニライブを行っていた。おしゃれな女性客が多い。

17年前から盲導犬育成事業を活発にしており、毎年、多額の寄付により中部盲導犬協会から表彰されている。お客第一のとても細



写真 16 「あさの」のライブ風景

やかなママであり、お客を楽しませることに徹していた。

表2 訪問した西三河のカラオケ喫茶

NO	所在地		店名	営業年数	経営	写真
①	岡崎市	大樹寺 3-12-22	バイオレット	21 年	女性	
②		日名西町 9-9	スマイル	27 年	男性	
③		上里 2-21-17	えみ	2 年	女性	
④		欠町綱笠 2-2	歌音	6 年	女性	
⑤	刈谷市	井谷町替田 11	絆	7 年	男性	写真 2.3
⑥	豊田市	青木町 3-190-1	わらら	8 年	女性	写真 4.5
⑦		金谷町 5-50	わたしの朝	8 年	男性	写真 6.7
⑧		小坂本町 6-10-1	うた club さんくす	15 年	女性	写真 8.9
⑨		青木町 3-190-1	マリア	17 年	女性	写真 10.11
⑩		勘八町中根 80-1	希望の樹（ゆめのき）	18 年	男性	
⑪		高上 1-22-2	パートⅡ	21 年	男性	写真 12.13
⑫		若林西町宮下 21-1	成ちゃん	3 年	女性	
⑬	安城市	高木町半崎 28-7	にりん草	5 年	女性	写真 14.15
⑭		日の出町 7-11	ニューセブン	5 年	男性	
⑮		箕和町唐生 216-2	ニューサルビア	10 年	男性	
⑯		横山町浜畔 38-2	茶楽	12 年	女性	
⑰	西尾市	永吉町 693-1	あさの	18 年	男性	写真 16
⑱		熊味町西平角 62-2	竜宮城	6 年	女性	
⑲		中原町道東 33-3	BOND	5 年	女性	
⑳	知立市	新池 2-63	せせらぎ	20 年	女性	

⑱ 竜宮城

店内が竜宮城にきたような錯覚をおこさせる作り。建物は35年前からスナックとして営業、6年前からカラオケ喫茶としてスタート。お客は55～85歳、70代が中心。気さくなママの人柄で夫婦連れが多い。音響が良く、歌いやすいと評判。ママがお店を続けて良かった点は、人との繋がり、イヤな点は、イヤなお客（嫌みを言う人）。お客が歌うのは演歌の新曲ばかり。頼母子講・稲荷講・伊勢講を経験したお客がいた。

⑲ BOND

店名はママが好きだった映画「007 シリーズ」の初代ジェームズ・ボンド役（ショーン・コネリー）と若い時よく通った喫茶店の名前から名付けた。最新のDAM(LIVEDAM STADIUM STAGE) 設置店。55歳～95歳の客。明るい店の作り、人柄のいいママさん。お店を続けて良かった点は、人との付き合い、イヤのことは気にしないのであまり感じない、とのこと。

4.7 知立市

⑳ せせらぎ

営業20年、40人は入れる、ゆったりとした店内。店名は「せせらぎ」のように流れ、いつまでもお客さんが途切れず来店して下さるようにとの思いから名付けた。母・娘で経

営、細やかな対応。ママは20年前公務員を定年退職しお店をオープン。営業は12時～17時のみ。お客は近所の70～80代が中心、上手くない人もいるが、歌を心から楽しんでいる様子。肺気腫の患者も酸素吸入器を引いて元気に歌う姿が印象的だった。お客の回転はいい。歌は懐メロ～新曲まで、すごいレパートリーに溢れる。

感染症予防対策として、歌う時意外はマスク着用の義務付け、白手袋・マイクカバーを進呈し徹底に努めていたのが印象的。

5 ご当地ソング⁽¹³⁾

5.1 DAM 配信曲

カラオケ喫茶でお客がよく歌う曲は、演歌・歌謡曲の新曲が中心であるが、DAMに配信された西三河をテーマにした曲もよく歌われている。

5.2 志賀重昂^{みかわ だんじ}『三河男児の歌』

『日本風景論』で有名な岡崎市出身の志賀重昂(1863-1927)⁽¹⁴⁾が郷土に対して意気込みをもって書いた、郷土愛・郷土意識溢れる詩である。

明治22(1889)年12月11日、西三河の小新聞「みかは」(発行・印刷人太田善右衛門、編輯人加藤勇次郎、主筆志賀重昂、発行所三

表3 ご当地ソング DAM 配信曲

市	曲名
西三河	「三河路の雪」(歌:美原しげる)、「三河路ふたり」(歌:美原しげる)、「三河情歌」(歌:浜まゆみ)、「三河ブルース」(歌:足立洋子)、「三河みれん」(歌:三河しずか)「恋して三河路」(歌:三代目コロムビア・ローズ 野村美奈)
豊田	「豊田心中～螢火の恋」(歌:沖田佳賀代子)、「香嵐溪慕情」(歌:花咲里佳)
西尾	「西尾恋歌」(歌:葵かを里)
岡崎	「岡崎五万石おどり」(歌:鈴木正夫・川崎千恵子)、「岡崎旅情」(歌:葵かを里)

河幡豆郡一色村三河新聞社) 第9号の第1面に発表された。⁽¹⁵⁾

「三河男児の歌」⁽¹⁶⁾

余輩は頃日三河國の少年に居常吟味せしめ、暗々裡に其の志氣を養成せしめばやとて、試みに左の如き歌句を作りたり。請ふ一閱あらんか。

汝見ずや段戸の山は五千尺 / 又見ずや矢矧の水は三十里 / 想ふ昔孤軍此の險に據る / 借問す當時將たる者は誰ぞ / 須臾にして賊兵勢雷の如く / 吾軍奮闘支へ得ず / 絶巔天に滲つて終古碧なり / 急湍石を嚙んで矢より疾し / 勤王を唱えて妖虜を攘はんと欲す / 足助の次郎臣重範 / 千騎萬騎天を轟かして來る / 七分は難に死し三分は潰ゆ / 潰ゆる者は辱を忍んで隴嶂に匿れ / 機會到らず餘烈在り / 嗟呼上帝の眼朦朧ならず / 段戸の山は秀でたり矢矧の水は清し / 揆亂反正天の縦るす所 / 江戸府を開き政教を統ぶ / 何ぞ科らん治極つて人心弛み / 大勢取次に西南に趨き / 挽回豈時無からんや / 嗟呼段戸の山は誰が為に高く / 三河男児請う往け / 臥薪嘗胆仇を報ひんと欲す / 鬱々久しく待つ天定まるの時 / 忽ち此の上に英雄を降す / 英霸孕み出す東照公 / 維れ文維れ武皇猷を賛け / 舜雨堯風六十州 / 由来文恬又武熙 / 此の土の佳氣長へに已む / 復興竟に期有り / 矢矧の水は誰か爲に號ぶ / 三河男児須く奮起すべし

DAMに配信されていないので、70代後半～90代の方はカラオケ喫茶でのイベントで、少し長くなるが、現代風にアレンジしたものアカペラで歌うそうだ。

「三河男児の歌」

1 雲に聳ゆる段戸山 / 波は静けき渥美湾 / 外に万里の海を見て / 内に沃野の富を占め

/ 流れも清き豊川や / 矢作大平澤流し

- 2 嗚呼山川の秀麗は / 凝りて偉人を生ずるか / 発して感化を与うるか / 三河の国は昔より / 益良武夫(ますらたけお)ならびいで / 勲(いさお)立てたる機(はた)多し
- 3 見よ足助の重範は / 建武の帝の大勅(おおみこと) / 拝すや義旗を押立てて / 黒白(あやめ)もわかず奮闘し / 笠置の難に従いし / 誉(ほまれ)は山より猶(なお)高し
- 4 四海の波は治まらで / 天泣き人やなやむ時 / 起って天下を一統し / 三百余年太平の / 基(もと)い定めし東照公 / 恵は海より猶深し
- 5 嗚呼慶元のその昔 / 大久保酒井井伊本多 / 千古の名將雲の如 / 此の地に起こり大八州(おおやしま) / 六十四州に振るいでし / 三河の当時思い見よ
- 6 辺海風は吹きささび / 攘夷の大波荒るる時 / 華山の大人(うし)は開港や / 海防論に身を捧げ / 天下の心を導けり / たれか功(いさお)を仰がざる
- 7 星もうつろい物変わり / 元氣漸くひそみしか / 維新此の方三河人 / 絶えてその名を知られず / 荒(すさ)れのみまさる竜が城 / 誰(たれ)が涙を注がざる
- 8 さあれ満韓二度の役 / 元山平壤ふみ破り / 遼陽奉天取りひしぎ / 勇名世界にかくれなき / 豊橋十八連隊ぞ / やがて三河の健児なる
- 9 嗚呼誠実を守りとし / 勤儉尚武を旨として / 徳をば修め智を磨き / 忠と孝とを尽くすべし / 百折(ひゃくとう)撓(たゆ)まぬ丹心ぞ / やがて三河の元氣なる
- 10 いでや三河の人々よ / 段戸の山は裂けぬとも / 矢作の水は枯れぬとも / 此の元氣をば失わで / 国に誠を致すべし / 家の風をも起こすべし

6 まとめ

山梨県ではご近所で風呂を貸しあう風呂無尽。本代をやりくりし合う書籍無尽。そして旅の費用を積み立てる旅行無尽といった。懇親会と庶民金融を兼ねた無尽講が現在でも存在する。親しい仲間が毎月のように同じ店に集う。飲食するだけでなく、その場で出し合う掛け金を基金として積み立て、順に貸し与える。担保を取らず少額を貸し、数人が連帯責任を負う。最近では融資の性格は薄まったものの、気心の知れた仲間と本音で話す大切な機会である点は変わらず、一生付き合う覚悟が前提にあるという⁽¹⁷⁾。

頼母子講とも呼ばれる無尽は山梨県では、鎌倉時代から各地にあったとされるが、愛知県は、現在ではほとんど消滅している状態である。今回の調査で西三河の一部の飲食店経営者が仲間と娯楽の一環として、頼母子講を継続している程度である。宗教的機能をもつ講以外は、多くが講の機能を停止、活動を縮小している。

「表4 東三河と西三河のカラオケ喫茶比較」でも明らかなように、西三河のカラオケ喫茶の客は70代が中心であり、明るく元気である。配偶者を亡くし寂しい思いをしている人や認知症が心配な人たちを迎え入れ、経営者を中心とした無尽という互助の精神が溢れている。

カラオケ喫茶は講を源流とし、時の流れを経て、講の機能がゆるやかにシフトした現代の「カラオケ講」であることが確認できた。そして、カラオケ喫茶の経営者が女性が占める割合は、東三河、西三河とも6割を超えており、女性の気配りのいき届いた細やかさが、「カラオケ講」の本質を支えている。西三河カラオケ喫茶の午前からの営業店はモーニングサービスを競っており、まさに「モーニング戦争」状態である。そして70代

を中心に集い合い、楽園とも言うべき状態だと痛感した。

東三河と西三河のカラオケ喫茶を比較した場合、お客の年齢層（東三河は60代～80代、西三河は70代が中心）以外、聞き取り項目で大きな差はなかった。

先日の朝日新聞（2020.10.11付朝刊）に「介護保険料を滞納して、預貯金や不動産といった資産の差し押え処分を受けた65歳以上の高齢者が増えている。2018年度は過去最多の1万9221人にのぼったことが、厚生労働省の調査でわかった。65歳以上の保険料が介護保険制度が始まった2000年度から約2倍に上昇したことも影響したとみられる」という心痛む記事があったが、「カラオケ講」に参加する人たちは、ほとんどが年金生活者であり、この種事案に巻き込まれないことを切に願うものである。

表4 東三河と西三河のカラオケ喫茶比較

項目		東三河（28 軒訪問）	西三河（20 軒訪問）
訪問の視点		文化・遊び	講集団
経営者への聞き取り	①営業年数	営業年数2～35年である。長く続いているお店は、人柄のいいママの存在が大きい。	
	②営業時間	一般的には、昼夜営業（12:00～17:00、19:00～23:00）であるが、最近はお客さんが高齢化し、半数は午前（7:00頃）～夕方（18:00）まで通しの営業に切り替えるお店が増えている。	
	③料金	ソフトドリンクは400円～600円でほとんどのお店が500円である。カラオケチケットは、1冊10枚～11枚綴りで1000円であるが、1曲100円のお店もある。	
	④お客の年齢層	60～80代の男女（夫婦・友達）が中心である。一部であるが90代で通う人もいる。	70代が中心、90代で通う人もいる。
	⑤お店を始めたきっかけ	「自分が歌が好きだから」、「定年退職後に何かをやりたいかった」、「人から頼まれた」、「地域の人が集まる場所がほしかった」、「地域に関わりたかったから」など様々である。 お店の開始は「スナックから」、「喫茶店から」、「最初からカラオケ喫茶」、「歌謡講師をしていてレッスン場を改造した」などであった。	
	⑥お店の自慢できる ところ（ウリ）	「いいお客が集まっている」他、半数以上のお店が「音響がいい」ことをあげている。	モーニングサービスの内容と音響。コーヒー一杯ずつのドリップ
	⑦お店を始めて 良かったこと	ほとんどの経営者が「多くの人との繋がりができた」と回答。 お客が多いのでいろいろな情報が入るなど	
	⑧経営者として苦勞 していること・ 困っていること	苦勞していることは、「お店の経営（特にカラオケリース代が約10万円は高い）」、「経営者に対する妬み」、「お店への不満」などである。 困っていることは、「お客同士のトラブル」、「マナー（営業開始時間）を守らないお客」、「認知症のお客がトイレを汚したり、水を流さない」、「清潔感のない人の入店」などであった。	苦勞していることは、高齢者中心なのでお客の回転が悪い、売り上げがあまり上がらない。 困っていることは「お客のトラブル」どちらかの肩を持つのはまずい。そして「嫌味を言うお客」。
	⑨講との関わり	不明（聞き取りをせず）	富国大栄講（豊川稲荷）で活動、頼母子講を経験

お客への聞き取り	①お店に通う理由	「自分と同世代で、同じ趣味の人達に出会える楽しみ」、「友達ができる」、「カラオケボックスでなく大勢の前で歌いたい」、「新曲を早く覚えて歌い自慢したい」、「演歌・歌謡曲に関する最新情報がはいる」、「店内でレッスンがある。（店主がカラオケ講師の場合）」、「地域のひと繋がりたい」などである。	
	②よく歌う曲	演歌・歌謡曲とも圧倒的に新曲が多い。新曲は男女・年齢を問わず、競うように新曲が歌われている。また「美空ひばり」の人气が未だに高く、75～85歳の女性を中心に、「乱れ髪」、「悲しい酒」、「裏町酒場」や「尾張の馬子唄」、「ひばりの木曾節」など多くの曲が歌われていた。	演歌・歌謡曲とも圧倒的に新曲が多い。新曲は男女・年齢を問わず、競うように新曲が歌われている。 DAM 配信のご当地ソングは東三河より多く「表3ご当地ソング DAM ダム配信曲」が歌われていた。
	③何歳頃からお店に通い始めたか	ほとんど、還暦を迎えてからという回答であり、男性は定年になってから、女性は60歳からという回答であった。	
	④移動手段	カラオケ喫茶は音響に配慮し、公共交通機関から離れた所にあり、移動手段は私有車に乗り合わせてという回答が多いが、近所の人は自転車・徒歩、さらに高齢者はシニアカー、中には歩行器（通称コロコロ）で通う人もいた	
	⑤お店に通う頻度（1週間での回数）	行きつけのお店を2～3軒もち、1週間に1～2回の頻度でお店に通う人が多かった。	行きつけのお店を1～2軒もち 1週間に1～2回の頻度でお店に通う人が多かった。
	⑥1回の滞在時間	平均して1回の滞在時間は2～4時間であるが、中には5～6時間という人もいた。	
	⑦1回に使うお金	平均して1000円位である。その内訳はソフトドリンク500円、カラオケチケットを1回で使うのは、平均して半分（5曲）位。	
	⑧講との関わり	不明（聞き取りをせず）	頼母子講・稲荷講・伊勢講を経験
お店の特徴		音響のこだわり	モーニングサービスが凄い 行政からの表彰（歌謡祭での入場料を福祉団体に寄付）
お店の雰囲気		私語は慎み、真剣に歌を聞き大きな拍手をしている、緊張感が漂う感じ	歌いたい人・聞きたい人・話したい それぞれで明るい、勢いのある感じ
お客の特徴		1人か2人連れが多い 全般として物静か	グループでの来店、お客同士仲がいい、特に連れ合いを亡くした人によく声を掛け合う
地域活動		不明（聞き取りをせず）	老人会の活動参加者が多い
経営者の女性比率		男性：8名、女性：20名（71%）	男性：8名、女性12名（60%）

付記

本稿作成にあたり、(株)カラオケ情報誌エース社長木戸一孝様他カラオケ喫茶関係者皆様の取材協力ならびに掲載を承諾していただき、御礼申し上げます。

注記

- (1)無尽はつきることがないという意味。無尽講は金銭の融通を目的とする講。一定の期日に講員が一定の掛金をなし、抽籤または入札によって所定の金額を渡し、講員全部に渡し終えた後、講を解散する組織。鎌倉時代から行われた。頼母子講「たのむ(田の実)から出た語」と同義語。
- (2)4 西三河のカラオケ喫茶事情 4. 2 岡崎市の①、「表2 訪問した西三河のカラオケ喫茶」の①
- (3)桜井徳太郎『結集の原点—共同体の崩壊と再生』弘文堂 1985 p191
- (4)成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版 1990 p121
昭和初年の山村調査の結果は、『山村生活調査第1 回報告書』にはじまり以後年次ごとに中間報告書が公開されたが、その最終的な報告書としてまとめられたのが『山村生活の研究』である。
- (5)同上書 p82
- (6)新谷尚紀編著『民俗学がわかる事典』日本実業出版社 1999 p104
- (7)上野和男編『民俗調査ハンドバック』吉川弘文館 1987 p148
- (8)愛知県史編纂委員会『愛知県史別編三河』愛知県 2006
- (9)カラオケ喫茶での聞き取り
- (10)伊勢神宮参拝は私有車で個人ごとに行くので代参講としての機能が果たせなくなっている。
- (11)愛知県史編纂委員会『愛知県史別編民俗1 総説』愛知県 2012 p574
- (12)成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版 1990 p115
- (13)その土地に関わりがあり、人々に親しまれ、時代を反映する歌である
- (14)明治・大正時代の思想家、地理学者、衆議院議

員

文久3(1863)年11月15日三河国岡崎(愛知県岡崎市)で藩士志賀重職の長男として出生、明治11(1878)年東京大(学予備門に入ったが、同13年札幌農学校に転じ、同17年に卒業。同校のキリスト教的傾向に同じなかった。長野県立長野教諭などを経て、同18年軍艦筑波に便乗し津島、さらにカロリン諸島、オーストラリア、フィジー、ハワイ等を巡航。その見聞をもとに同20年『南洋時事』を刊行、文名が広まった同21年に三宅雪嶺・杉浦重剛らと政教社を創立、雑誌『日本人』を発行、その主筆となり「国粹保存主義」を提唱、同年33年には伊藤博文のすすめで立憲政友会に加入、同35年・36年に衆議院に当選。

地学に関心を抱いており、同37年の落選後は『日本風景論』を著す。以後地理学者として名をせる。

- (15)岡崎地方史研究会『研究紀要第十号』桃山工房 1982 p103
- (16)愛知県教育會編『郷土読本 文藝篇』川瀬書店 1933 p173 p171-173
- (17)朝日新聞 2020年9月22日付朝刊

参考文献

- ・谷口功一 スナック研究会編『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』白水社 2017
- ・長谷部八郎編『「講」研究の可能性』慶友社 2013
- ・長谷部八郎編『「講」研究の可能性Ⅱ』慶友社 2014
- ・畑中章宏『21世紀の民俗学』角川書店 2017
- ・福田アジオ『現代日本の民俗学』吉川弘文館 2014
- ・福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文館 1983
- ・松平誠『祭の文化—都市がつくる生活文化のかたち』有斐閣選書 1983
- ・宮田登『現代民族論の課題』未来社 1986
- ・由井健之助『頼母子講と其の法律関係』岩波書店 1935

